

～光の春～

立春を過ぎ、暦の上では春となっていますが、吹く風は依然として冷たく、春本番はまだ遠くに感じられます。

東京の冬至(12月21日頃)の日の、気温の平年値(2020年までの30年間平均)は7.1℃であるのに対し、本日2月20日の平年値は6.4℃と、冬至の頃よりもむしろ低くなっています。しかしながら、太陽の南中高度(真南にきた時の地面から測った角度)を比較すると、冬至の日には約31°であったのに対し2月20日には約43°で、約12°高くなっており、全天日射量を比較すると冬至の頃より約1.5倍強くなっています。さらに、日出の時刻は約24分間早く、日没の時刻は約56分間遅くなり、その結果昼間の長さが約80分間長くなっています。

このように太陽の光が気温に先行して増大していく今頃の季節を「光の春」と表現します。この言葉は気象キャスターの、故、倉嶋厚(くらしまあつし)さん(1924-2017)(気象庁主任予報官、理学博士、エッセイスト、「熱帯夜」の生みの親)が、ロシアの言葉を日本語に翻訳し、テレビの気象番組や著作物等で世に紹介して広まった言葉です。シベリア等の高緯度地域では東京よりもなお一層、季節による光の強さの変化や日照時間の変化が大きいのです。中学2年の理科や社会科の地理等で学ぶ(学んだ)内容です。

「光の春」の次には、雪国では雪解けのせせらぎの音、ウグイスの初鳴き「ホーホケキョ」(東京の平年値は3月6日頃)など、「音の春」が訪れます。そしてサクラが咲く頃(東京のソメイヨシノ開花の平年値は3月24日頃)、ヒトがようやく「温かくなってきたな」と感じる頃が「気温の春」です。

このように必ず春は来ますがいつぺんには来ずに、順を追って段階的にやって来るというわけです。もっとも最近では地球温暖化の影響か、寒い冬からいきなり暑い夏になるような感覚を覚え、「四季」ならぬ「二季」という言葉もできました。

二月は進学や進級といった大きな変化を前に、不安や厳しさを感じることもあるでしょう。しかし、無意識のうちに陽の光が強まっているように、これまでの学習や活動で積み重ねてきた努力は確実に皆さんの内側を照らし、次へのエネルギーを蓄えているはずです。年度末という一つの締めくくりは単なる終わりではなく、新年度の春を謳歌するための大切な準備期間です。自分の足元をしっかりと見つめて一歩ずつ進んでいきましょう。その先に、一人一人の努力が花開く「心の春」が必ず待っています。残り少ない今の学年や学級での日々を大切に、希望という光を胸に、一丸となって次の一歩を踏み出していきましょう。

【文責 佐藤 豊】

